説教20220619「主はわたしの光」詩編２７編、ペトロ二3：11-18

　　当教会の今年度の年度目標は、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」でありますが、かつて何かの註解書を読んでいまして、次のようなことが書いてあったのを記憶しています。「この箇所の『あなたがたの光』というのは決して自分自身の光ということではなく、主の光が照り返されて、あなた方自身が光を放っているかのように見えるだけです」と。

この解釈は、第二コリント書の４章６節７節の、私たち自身は光を発しない欠けのある土の器であって、私たちの内に輝くイエス・キリストの御顔の栄光の光がその欠けを通して外に光を放っているのだ、という御言葉を合わせて聞けば、大変納得がいくことであります。つまり、この註解書では、私たちが主の光に照らされて歩まされていくうちに、主に対する恐れや謙遜を忘れて、自分を誇ることがないように、との戒めを含めてこのように解釈をされたのだと思われます。確かにこの戒めは大切です。私たちも主の前に自分を誇ることがないように、この年度目標と共に戒めて参りましょう。

さて、今日の聖書箇所も「主はわたしの光」というように、わたしの光のことから語られます。今日の詩編は、ダビデが未だ召命を受ける前の若かりし頃に詠んだ歌だとされていますが、「主はわたしの光」という言葉からはどのように聞いても、自分を誇るような態度や感情が聴き取れません。「わたしの光」というのは主御自身なのですから、それは当然といえば当然ですが、逆に、主と私とが光を介して一つとなっているような喜びの方を聴き取ることが出来るように思います。

このように、主なる神への信頼と喜びとを、一言で明白に告白出来た若きダビデは、自分を誇ることから実に遠かった者であることが知らされます。彼は、主を恐れ主の御前にへりくだる生活を続けていたのでした。

さて、今日の詩編にも、ダビデが敵から迫られて命を狙われる状況が詠われていますが、それは強敵に囲まれたイスラエルの同胞たちが皆、味わい続けた苦しみであります。神の民であるイスラエルは、周りから搾取され迫害された貧しい人々でした。ダビデ自身もその貧しい人の一人でした。その貧しさとはただ物質的に恵まれない、というよりは、自分の欲望を誇る外敵たちによって、主なる神の救いの計画をないがしろにされるような仕打ちを受けて、御心への信頼が奪い取られそうな状況にあるということでしょう。詩編１０編２節には「貧しい人が神に逆らう傲慢な者に責め立てられて　その策略に陥ろうとしている」という様にその苦しみの状況が詠われています。

敵は悪しき思いと行いによってダビデに迫ってきます。ダビデから主への信頼を奪い取ろうとして、彼を苦しめ、恐れさせようとするのです。しかし、ダビデは「わたしの心は恐れない」と断言します。なぜなら彼は、全く主に寄り頼んでいるからです。

そのときダビデが、主なる神に願ったことは一つだけでした。それは４節に詠われているように、「命のある限り、主の家に宿り　主を仰ぎ望んで喜びを得　その宮で朝を迎えることを」、ダビデはただ一つだけ主に願ったのでした。新しい聖書協会共同訳では次の様に訳されています。「命のあるかぎり主の家に住み　主の麗しさにまみえ　主の宮で尋ね求めることを。」

ダビデは敵との戦いのに、この様に主に願い求めているのです。敵はダビデから主への信頼を引きはがそうとして挑んできます。ですからダビデは更に主の家に住むことを求めるのです。彼は主の家で主の喜びを得て、その喜びは戦いを挑まれることによる恐怖に勝っているのです。彼は、戦いの最中でありながら、主によって今ここで、主の喜びのうちに入れられているのです。戦いの最中といういわば「死ぬる者の地[[1]](#footnote-1)」にあってもダビデは、命ある限り、主の喜びに住まうことが出来るのです。そして主の喜びとは永遠に続くことですから、彼は永遠に主の家に住んで、永遠に主の喜びのうちに入れられるということなのです。

５節６節では、ダビデが主の幕屋にかくまわれて災いを逃れる様子が詠われています。岩というのは主なる神ご自身のことで、群がる敵からダビデを高く上げて、彼を救われるのです。ダビデは救われた喜びに、歓声を上げていけにえを捧げ、主に向かって賛美の歌をうたうのです。

さてこの様にダビデが救われた喜びというのは、最後まで彼が主に信頼し、主の家に住み続けたことによってもたらされました。もし仮にダビデが、主への信頼を裏切る形で敵と手を打ってしまったならば、ダビデにこのような救いの喜びがもたらされることはなかったでしょう。この様に最後まで主に信頼し、主に従っていくダビデには、主に対する恐れがありました。彼は敵を恐れたのではなく、主こそを恐れたので、主に引き寄せられ主の幕屋に住まうことが出来たのでした。この様に人間は恐れるものの手に落ちるのです。

では、主に対するこの恐れは、どのようにして主の喜びへと移り行くのでしょうか。それは幕屋の奥深くにかくまわれ、主に近づいたダビデが、主の裁き[[2]](#footnote-2)を受けたからでありましょう。「死ぬる者の地 」での戦いにあって、ダビデは主に信頼して、よろめくことなく完全な道を歩きました。そして主の裁きを求めました[[3]](#footnote-3)。「主よ、わたしを調べ、試み、はらわたと心を火をもって試してください」[[4]](#footnote-4)と。この様に近づいて来るダビデを主は疎かにはされず、もし、ダビデのうちに悪や罪が見られたならば、主ご自身がそれらを打ち砕き、その罪を赦して、ダビデは清くされ聖別されたのでした。そうやって彼は主の家に宿り、主の喜びに満たされることが出来たのでした。

この様にダビデは今ここが「死ぬる者の地 」であろうとも、その最中で、主を呼び求めその都度、主の憐れみと御顔を尋ね求めることが出来るようにされました。７節以降もダビデと敵との戦いは続いています。それどころか「偽りの証人と暴言を吐く者が　私に向かって立ち上が」るなどして、悪しき敵の勢力はいや増しているように見受けられます。それでも主による罪の赦しの救いの喜びを知ったダビデは、まさに、主なる神にすがりつくように、「私を置き去りにせず、見捨てないでください　わが救いの神よ」と告白するようにされています。ダビデは「死ぬる者の地 」の闇のなかで、主の光を自分の光とすることが出来たのでした。

今までダビデ個人に対する主なる神の御救いの喜びを見てきましたが、それでは私たちクリスチャンに対して、主なる神はこの詩編27編で何を語りかけておられるのでしょうか。私たちはこの御言葉を聞くにあたって、先ず、私たち自身もダビデと同じ、貧しい者の一人であり、周りの悪しき者たちとの戦いに臨まされる者であり、又、命のある限り、主の家に宿ることだけを願い求め、主を恐れつつ主の御前にへりくだって歩まされる者であることを告白しましょう。

そのうえで、私たちは主イエス・キリストが私たちを救って下さったことを覚えたいと思います。主イエスは、主を信じる者たち一人一人が救われるために、私たちの罪を背負って十字架につかれ、その流された血によって、私たちの罪を赦して下さいました。主イエスは「死ぬる者の地 」の直中で、私たちと同じ人間となって、死んでいる者の手にかかって死んでくださいました。それはこの地が「死ぬる者の地 」ではなく、「命あるものの地」へと変えられるためでした。

私たち一人一人は、ダビデの様に主に信頼しながら、主に罪赦されつつ、悪との戦いに臨んでいます。主の光は私の光となって、私を照らし、敵の闇をも照らし出すことでしょう。しかし、敵たちの闇の深さは如何ばかりでしょうか。私は、偽りの証人や、不法を言い広める者たちの前にはとてもかなわないと思わされるかもしれません。私は主イエスを呼び求め、私を見捨てないで下さいと叫ぶことでしょう。それは時に自分ひとりの孤独な戦いであると思わされるときがあるでしょう。

しかし、主イエス・キリストはどこに住まわれるのかを私たちは覚えましょう。第一コリント書の3章 16節には次の様に記されています。「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。」このように主イエスが自分の内に住んで下さると信じる時、私自身が主の家とされ、私はまさに主の光と一体となり主の喜びと一体とされるのです。また、主イエスは教会の頭であり、私たちは教会の体の枝であります。主イエスはこの様にして、私たち一人一人が一体となることを望まれているのです。

主イエスは「死ぬる者の地 」で血を流されて死んでくださり、それから復活されたので、「死ぬる者の地 」は、主イエスによって「命あるものの地」へと変えられました。そして今も日々の恵みによって、変えられつつあります。主イエスの光は、全ての者の光となって、全ての闇を照らし出しています。今日の詩編の最後で詠われています御言葉「わたしは信じます　命あるものの地で主の恵みを見ることを。主を待ち望め　雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め。」は、私たちの内に住んで下さる主イエスの御言葉でもあり、又、私たち一人一人が主をほめたたえる告白の言葉ともなったのです。

主イエスはこの地を「命あるものの地」へと完全につくり変え、完成へと導いておられます。又、主イエスを信じる私たち一人一人もその主イエスの御業に携わる者とされているのです。「命あるものの地」の全てを照らし、闇を駆逐する主イエスの光の前には、何も敵う者はありません。しかし「光よりも闇の方を好ん[[5]](#footnote-5)」でいては、私たちは「命あるものの地」へ向かうことが出来ないのです。私たちは自分自身を主の家として、主イエスに住んで頂きましょう。そして主イエスの光を自分の光とし、その光を全ての人を照らす光として輝かせて参りましょう。私たちに自分を誇っている時間はありません。主イエスが、この全地を主の光で満たし、主の喜びで満たされるように私たちに言われているからです。どうか私たちがその主イエスの召命に生き、日々恵みの上に恵みを受けながら、「命あるものの地」が完成する永遠の喜びのときを待ち望むことが出来ますように。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（4,249字）

お祈りします

天の父よ。

あなたは、御子イエスをこの地に遣わして、私たち一人ひとりと共に住んで下さり、永遠に続く命へと招いて下さいます。どうか私たちが御子の光に照らされ、一切の闇の業から解き放たなたれ、まことの喜びの内にこの地上を歩んで行くことが出来ますように。

恐るべきあなたの御業は、どんな悪からも私たちを救い出して下さいます。どうか、私たちがあなたの御前にひれ伏し、自分を誇ることから自由にされ、遂に、天上の教会にてあなたを礼拝し賛美することが出来ますよう、私たちを戒め導いて下さい。

今日与えられました御言葉を、この一週間私たちが昼も夜も口ずさみ、清らかな思いと、よい言葉と、心強い行いを与えられ、あなたと隣り人とに仕えていくことが出来ますように。あなたは戦争、争い、分断がある処に、もたらして下さるただ一人の御方であり、是絶望を希望へと変えて下さるただ一人の御方です。そのあなたと、命ある限り共にすみ、あなたを仰ぎ望んで生活をし、遂にあなたの永遠の喜びの内へと引き寄せて下さい。

父と聖霊と共に一体であり

1. 『アウグスティヌス著作集第18巻Ⅰ』（今義博他訳、教文館、1997） p.288 [↑](#footnote-ref-1)
2. 月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅱ』（新教出版社、2006） p.33 [↑](#footnote-ref-2)
3. 詩編26：1 [↑](#footnote-ref-3)
4. 詩編26：2 [↑](#footnote-ref-4)
5. ヨハネによる福音書3：19 [↑](#footnote-ref-5)